

商いの新しいものさし

（株）商い創造研究所
代表取締役

松本 大地

第179回

日常のハレを提供する書店

日本の書店数は2003年に2万880店だったのが、24年には1万417店と20年間で半減した。24年の実店舗の売上高は5385億円まで下がり続けた一方で、電子書籍の同年市場規模は前年比3・9%増の6703億円と推計され、29年には7794億円と予測される。驚くべきは全国で1741ある自治体の中で、書店が1軒もない自治体は約3割の493カ所にも上る。実店舗の

存在意義が薄まったように見えるが、本との出会い方次第では新たなビジネス展開や、本を軸にした街づくりにつながるケースも見受けられる。米国ロサンゼルスのレストランの一等地にて2005年に開業した「The LAST BOOKSTORE」は、1914年に建てられた銀行をリノベーションして誕生した。店名の由来はオンライン書籍が当たり前の時代、実店舗の書店はやがて恐る運命にあると揶揄して命名された。今やロサンゼルス最大の中古と新品の両方を取り扱う書店となり、買い取りに加えてユーザーから寄付される本も多い。店内は古本をモチーフにし

たアートミュージアムと化し、「世界で最も美しい20の本屋」に選出された。本を通して人とのつながりを持ちたいと思う人が来店し、ネットでは不可能な体験価値をSNSで広め合う。書店のリアルメリットを発揮した成功事例である。地域の街づくりに貢献している代表的書店と言え、2017年に開業した「柏の葉T-SITE」を挙げたい。店舗面積1700坪の2層空間に葛葉書店を核にテナント約20店を揃え、本を売る場所だけでなく、本を通して豊かなライフスタイル提案を繰り返している。1階のテーマは「毎日の食と暮らし」。書店を核にベーカーリー&カフェのPENNY LANE、スターバックス、房総の食を集めた房の駅、ペットグッズやギャラリーで構成される。2階フロアのテーマは「親と子のコミュニケーション」。1万6000タイトル以上の

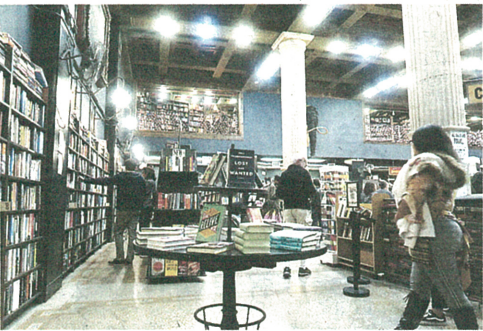
児童書を揃え、ボーネルンドの遊び場やアカチャホンポセレクト、写真スタジオ、授乳室も完備し、子育て中のママやパパ達がのんびり時間を過ごす。多彩な日常のイベントも数多く開催され、「本と生活が隣り合わせに編集された日常の幸せな居場所」だと徐々に再訪して感じ入った。日常の幸せ感を目の前にある「柏の葉アクアテラス」の存在も大きい。単なる河川の水を蓄えた調整池を住民が憩える親水空間へと変えた秀逸な環境デザインにより、散歩やピクニック、音楽などを楽しむステージなど、T-SITEと合体したベッドタウンのリビングルームになった。この風景は「日常のハレ」と呼ぶに相応しく、街づくり×書店の成功事例と言えよう。

日常のハレとは何であるのか。「ハレ」はお祭りや年中行事などを行う特別な日、非日常という意味があり、「ケ」は普段の生活を表した日常という意味で使われる。日常のハレとは、日常の中に小さな非日常を取り入れ、ちょっとした工夫で普段の生活を豊かにすることで、生活に新たな意味や楽しさを見つけると

いう筆者なりの考え方である。心地よい公園や図書館で過ごす、ペットと散歩しながらカフェでフレッシュ、食卓に花を飾るなど、日常の中でちょっとした特別なトキやコトを大切にすると暮らし方をイメージしている。最近、日常のハレが都心部にも次々と広がってきた。出版次の日本出版販売は本と空間を提供する「文喫」事業を展開するが、9月にはニューマン高輪に「BUNKI TSU TOKYO」ブランドで開業した。1000坪の自由で楽しい大型書店は、まるで心が休まる小さな公園のようであり、カフェラウンジでコーヒーを飲みながら、ゆっくりと好きな本を読む、学習する、仕事をする都心の居場所になった。

地域価値を上げ続ける柏の葉T-SITE

BUNKI TSU TOKYOが開業する前は、370坪で展開した名古屋の中日ビル内にある文喫が最大規模だった。そのテーマは「本屋と大衆茶ホール」であり、名古屋の喫茶店文化を表現した環境空間の中で、朝はモーニングの無料提供もあるなど、栄エリアの居場所として多層な人に使われている。



アートミュージアム化したTHE LAST BOOKSTORE

店内は古本をモチーフにし

6000タイトル以上の



地域価値を上げ続ける柏の葉T-SITE

BUNKI TSU TOKYO

れないと心底思った。